

幸田文の感覚表現

——「肌ざわり」の描写を対象に——

水藤 新子

【キーワード】 幸田文 触覚 オノマトペ 比喩表現 共感覚表現

1 はじめに

幸田文(1904～1990)の作品は、その表現の自由さで、他の多くの書き手と一線を画している。

弱い夕風が出ていた。この風が境で、するする夕方の幕が降りて来るだろう。いまお膳を出せばお鮎子が三まわりもして暮れきる。気温がさがる。雨戸を入れて、燈が明るくなる。障子を立てて、部屋が小ぢんまりとして、人はちかちかと寄る。ここがきっかけというものだった。もうここが逃がせない時間だった。朝明けから起きてしたくしたものが、ここでやっと花に咲くきっかけであるが、娘はまだ帰らなかった。

——「段」(1954)

戦時下の祝いの席である。關酒の試験を頼みに薬局へ使いに出した娘が帰らないまま、夕餉はもう出される時を迎えていた。ごく客観的な短文を重ねて、しかしそこに関わる者の「待つ」思いが伺われる。料る者、もてなされる者、気持ちの波はともに高みを極めつつある。

「幕が降りる」は慣用的な表現だが、「するする」というオノマトペと共に起することで、具体的な動きが想起される。あと何分で「暮れきる」とせず、「お鮎子が三まわり」と見るのは台所を預かる者の目だ。心尽くしの膳は、出すべき間合いで出されて初めて意味がある。「花に咲く」と見立てられたその時は、ぎりぎりの、動かしようのない間合いなのかわかるだろう。

いずれも「時」の感覚的な把握を描いた例だが、その描き方は一様ではない。オノマトペと慣用句との併用、比喩表現、そして生活に根ざした視点から成る描写を重ねて、すっきりと描かれている。そして幸田文らしさとは、何よりもこうした感覚表現⁽¹⁾の豊かさにある。

今回は、幸田文作品の文体的特性を支える大きな要素である感覚表現のうち、特に触覚の表現に焦点を当て、予備調査を行った⁽²⁾。

2 感覚表現の定義

一般に「感覚表現」という用語は、感覚の言語化と、感覚的把握との両義で用いられている。前者はいわゆる五感——実際の身体感覚を言語化した表現であり(例「舌を刺すような辛さ」)、後者は心理状態や認識の対象を感覚的に捉えた表現(例「辛口の批評」)である。

上記の二例はいずれも比喩表現だが、感覚的把握には、オノマトペを用いた表現も含まれる。口あたりを例に採るなら、「まったり」なのか「さっくり」なのかで、その「感じ」は全く別のものとなってくる。

また「冷たい声」のように、ある感覚を表すのに別のある感覚を表す語を借用してくる表現——共感覚⁽³⁾表現も考えられる。「冷たい声」の場合は皮膚感覚、即ち触覚の「冷たい」が聴覚の領域に転移して用いられたと考えるが、こうした感覚間転移の方向性には法則がある。即ち、「触覚→聴覚」の方向性は決まっており、逆の転移はほぼあり得ない。

感覚表現を言語化した表現を調査するに当たっては、上記のすべての観点から用例を収集し、分析を加えることとした。ただ共感覚表現は「共感覚メタファ」「共感覚比喩」とも呼ばれ、比喩表現の一種と見做されることから、ここでも比喩表現の下位分類として扱うものとする。

3 分析の対象と調査作品

五感の表現のうち、最も出現率の高いのは視覚、次いで聴覚、その次が触覚⁽⁴⁾と言われる。つまり一般的には、触覚の表現は比較的拾いにくいと考えられる。「きもの」を題材にした作品を対象とすれば、色柄等の視覚的な表現ばかりでなく、その「肌ざわり」の描写も相当数現れるものと予想して、今回は以下の6作品を調査対象とした。尚、①は小説、②以下は随筆である。

①「きもの」(1965.6~1967.7『新潮』/全集17巻)	のべ119例
②「きもの」(1967.1~12『毎日グラフ』/全集18巻)	22例
③「きものとおんな」(1967.11.1『暮しの設計』/全集18巻)	9例
④「関東のきもの」(1967.12.25 鯨岡阿美子編『きもの——運び方ときこなし』/全集18巻)	4例
⑤「着物(<こんなこと>)」(1948.4.30『新文学』/全集1巻)	1例
⑥「きもの三題」(1948.10.1『若い婦人』/全集1巻)	5例
	計 160例

4 調査結果

4.1 オノマトペ

オノマトペを用いた例は、のべ100例/異なり91例に上った。

小説「きもの」の主人公・るつ子は癩の強い子供だった。身に着けるものについても選り好みが激しい。綺麗な着物、よい着物が着たいわけではない。ただ、肌ざわりの好き嫌いははっきりしているのだ（以下、特に断りのない場合は、小説「きもの」の用例とする）。

- 1 ごわごわしたのが嫌いだね。しなしなするもの、新しく突張つてるのもいやがる。厚く重くなってるのもよくないだろ。軽くて、短くて、すべっと薄くて、からだ自由動かせるときの気が入るんだろ？

手を焼く母に対し、祖母はそんなるつ子の好みをすっかり見抜いている。「ごわごわ」とした硬さも「しなしな」とした腰のなさも嫌い。下ろしたての張りも、厚さや重さもいやで、身動きの楽さが最優先。「すべっ」は耳慣れない音だが、

- 2 (唐棧は)糸細で、布目の詰んだすっぺりした平織りで、一種独特なしなやかな触感があります。[関東の着物]のように用いられ、平らなさまをいう(5)「すっぺり」をもとにした、既成語の変形(6)と考えられる。

姉二人のお下がり性のなさに苛立ち、毛織物のセルにはアレルギー反応を示す孫を見ていて、祖母はふと思いつく。

- 3 るつ子のように着心地でばかり文句をいう子は、案外羽二重などがすべすべして、気に入るかもしれない。

「重くて、ひやっこ」い羽二重は主に男性の着るものとされていたが、案の定るつ子には向いていた。

- 4 肩へ羽織ったときがもうほかの布地と違うさわりで、さらさらとしていた。(略)着てみればさほどひやひやもしない。

- 5 少し冷えて、さらさらと手になめらかな羽二重は、るつ子を慰め元気づけた。

身体にまつわりつかず、着心地のよい布の触感は、滑らかさをいう「すべすべ」、軽さや薄さを示す「さらさら」で表される。

- 6 じょろじょろしている振袖、汚れっぱなしのいい着物、そんなの嫌です。

女学校を卒業後、ロンドンへ行った友人が、日本人が振袖を着てほめられる話を書いてきた。しかし海外では、きちんとした手入れができるはずもない。「袖の先の丸味が汚れている」のを見ると「ぶるっと鳥肌が立って気味がわるい。」いくら受けがよいからといって、「縮緬のしほへこびりついた垢は、目もあてられ」ないと言うのだ。

「じょろじょろ」は、前出の「さらさら」と同じく水の流れを表すが、水分の多さをも意味する。この場合は、単なる水気というよりは身体か

ら発散される湿気と考えられよう。汗を吸い込み、体熱や体臭を含んだ着物の肌ざわりは、粘りつく「べたべた」でも、水分過多の「じとじと」でもよさそうだ。が、長い袂がまとわりつくかのような「じょろじょろ」の一語のせいで、持ち重りならぬ着重りの不快さが示されているように思う。

7 汚れた袷のぼてぼてしたのを、軽快な新しい単衣に着替えるのは、いかにもからだが自由になったという気がして、子供心にもいい気持だった。[きもの(随筆)]

同じ着物の汚れだが、「ぼてぼて」となると「じょろじょろ」よりも重い印象がある。海外のパーティーで着て見せる振袖と、衣替えまで着続ける普段着の袷とでは、汚れの沁み込み方も桁が違うせいだろう。

8 よそいきのいい着物も、るつ子の嫌うものだった。でれっと肩へ掛ってくる重みも不愉快だし、裾長で歩くたびに足首へからみつくのも気色わるかった。

9 どてら——なんだかもたもたした重点の感じられるような言葉だと思ふ [きもの(随筆)]

8「でれっ」はしまりなくだらしないさま、9「もたもた」はのろのろとはかどらないさまをいう。「よそいきのいい着物」が「不愉快」というのは意外だが、「でれっ」はしなだれかかるさまでもあり、そのように「肩へ掛ってくる」となれば、着手の不快感も肯けよう。オノマトペを用いることで、その「重さ」「重み」の質は限定され、読み手にもより具体的なものとして理解されるのである。

4.2 比喩表現

比喩表現を用いた例は、のべ46例／異なり43例に上った。

4.2.1 直喩・隠喩

次項で見る共感覚表現に対し、一般的な比喩表現という意味合いで、まず直喩・隠喩を扱う。比喩の分類については、中村明が受容者の理解過程の違いに着目し、言語的なあり方から三分類したが(7)、ここではあくまで表現者の「感覚表現」を分析する立場から、古来の修辞学で示された類型を用いることとした。

これらの比喩を用いた表現は、のべ42例／異なり40例あった。

前項でも見た通り、るつ子は滑らかな着心地を好む。子供の頃、最も好きだったのは「手拭ゆかたの洗いざらし」だった。「しなやかな布地なのに洗濯したあと」につく、「肌に心地いい適当な固さ」のせいだ。これに優る着物に、長らくるつ子は出会えずにいた。

10 ごわごわしたのが嫌いだね。しなしなするのも、新しく突張っ

てるのもいやがる。厚く重くなってるのもよくないだろ。

- 11 新品の緋木綿のごそっぽさ、肩揚げも腰揚げも突張りかえっていて、着物はるつ子のからだへ附いてこない。

一口に「固さ」と言っても、そこには注文がある。糊の効いた下ろしたてでは、「突張ってる」ばかりで駄目だ。硬直し、着る者の意に染まぬこと甚だしい。こわぼったものが触れ合うときに立てる音「ごそごそ」を元にしたらしき「ごそっぽさ」も、その感触の悪さを示している。

- 12 生まれてはじめてセルに手を通してみると、るつ子には意外に肌ざわりが悪かった。絹物のような柔かさはなく、木綿のようなさわやかさもなく、厚ぼったく、素直でなく、しかも毛織物のもつ嫌な匂いがあった。

身動きのしづらさを、ここでは「素直でな」と言う。布が、人と同様に性格を持っているかのような表現だ。

「絹物のような柔かさはなく、木綿のようなさわやかさもなく、(略)素直でなく」と畳み掛ける、ないない尽くしの反復も効果的だ。

- 13 木綿というのは夏はよく陽をふせぎ、冬はあたたかく、肌ざわりは少々無骨ですがつかずはなれずの着心地、軽くて、丈夫で、手荒い洗濯にもたえ、ちょうどほどよい人情みたいな、気がねのいらない気のする布です。[きものとおんな]

「無骨」は、「こちなし」の音読から成った語であり、無風流であったり、行動や性格が角張っていることをいう。12同様、木綿を人——特に男性になぞらえた表現と言えよう。

続く下線部は一見、ひとまとまりで「布」にかかるようだが、木綿の性質を指すのは前半で、後半は着る者の感想として区別するのがよいだろう。着心地のよさ、扱いのよさに「つかずはなれずの」「ほどよい人情」を感じ取り、「気がねのいない」相手と見立てた、親しみの持てる表現である。

- 14 男ものの丈夫むきな足袋に、石底というのがあったが太い糸でがんじょうに織られた厚い生地で、まったく畳が悲鳴をあげるほどのごわごわ。[きもの(随筆)]

「がんじょう」は「無骨」と違って、人だけでなく物にも普通に用いる。「まったく畳が悲鳴をあげるほど」の強度というから、相当なものなのだろう。ここで擬人法の対象となっているのは布ではなく、その布に擦られる畳の側だ。「ごわごわ」の足袋で踏まれる畳の視点に立ち、同化したかのような表現が斬新である。

そもそも「石底」という名前自体、比喩的な命名に基づくものであり、わかりやすい。

15 もの珍しい生まれてはじめての触感。それはあまりいい気持のものではなく、胸とおなかへ仕切りを入れられてしまった気がし、おなかが狭くなって、中の臓腑が窮屈になった感じがあった。

初めて「西洋下穿」をはいたときの、ゴムで締める感触である。和服とは全く別の着心地がしたことは理解できても、具体的にどう感じたかまでは想像し得ない。胴体が仕切られ、内臓が圧迫されると訊いて初めて、違和感の大きさに納得がいく。洋装が行き直るまでには、こうした戸惑いがいくつも克服されたことだろう。

さて、ここまでは具体的な「肌ざわり」の表現を見てきたが、続いて抽象的なレベルへと目を向ける。

16 おまえのお母さんはその点、厚手にできた女だったから、軽薄ではなかったよ。

震災後、糊口をしのぐため慣れない商売を始めた。「八百屋の店のはじめをあけてもらって、そこへ地下足袋を並べてみ」たところ、思いがけず売れた。当初は押され気味だったものの、「忽ちすらすらと対応できるようになった」が、祖母は見逃さず釘を刺す。「蓮っ葉」になるな、「下司なものいいになりさがる」など言うのだ。

布が「厚手」なように人としての幅があり、どのような相手と接しようとも下品に流されないよさを、亡くなった母を引き合いに出して説かれ、るつ子ははっとする。

17 想像したよりずっと背が高いし、あれより老けていた。色男というほどではないし、垢抜けてもいない。然し、全体に薄くできている人である。

見合い写真でしか知らない人が、偶然目の前に現われた。動く姿を見ている、「ああ、この人が」と思い当たった場面である。

「薄くできている」は、おそらくからだつきだろう。「胸が薄い」など、ごく日常的に用いる表現である。しかしそれならば、「薄いからだつきの人」とした方がわかりやすい。「色男というほどではないし、垢抜けてもいない」に続くことから、接する者に与える印象が濃厚でない、という程度にとるべきか。目に見える特徴なのか、感じ取る人となりなのか、実は解釈の幅が広い表現なのではないか。

16と17は対とも見做し得る表現だが、一見して具体的な17の方が、実のところより抽象性を孕んでいるように思う。

18 自分もこれからどんなに変わって行くか、るつ子は峠に立った冷気を感じていた。

人は「持って生まれた性質と、生きている環境で」一度ならず変わる。医者と縁付いて権高な上の姉、商家に嫁いで実利的な中の姉を見ていて、

るつ子はわが身を振り返る。結婚を間近に控え、自分もこの先どう変わるのか。期待よりは不安、そして緊張の勝った思いは、高みに上ったときに感じる「冷氣」に等しい。

心理的な変化は体温に反映される。「背筋がひんやりする」でもよさそうだが、「峠」は人里離れた場所だ。そこに「立った」とすることで、家族の庇護を離れ、新しい人生に旅立って行く心細さは、より切実なものと感じられるのではないだろうか。

19 るつ子は倒されるままに倒れた。はじめての感覚が一時にあちこちに押捺された。間もなく裸の胸が相手の裸の胸を感じ、下着のずるずるとはがされる感覚を知った。自分の手でなく、人の手はがす下着が、腰をきしっておりていった。それが恙なく進行している結婚の行事であった。

初夜を迎え、夫となった人のなすがままにされる身体は、必要以上に鋭敏になっている。未知の触感はただ触れられた、といったものであるはずもない。「押捺」は、圧倒的な力で掴まれ、抑えつけられる経験からだろうが、妻として所有される者への、いわば検印作業をも連想させて、何か無残な印象すら覚える。

下着は「人の手で」脱がされる、否、「はがされる」。「びりびり」や「べりっ」なら布の破れる音であり、相手の乱暴さが際立っただろう。が、「ずるずる」という様態を添えたことで、るつ子の恥ずかしさ、なし崩しに肌をさらす憐れに、焦点が当たったのではないか。

オノマトペは象徴音とも言い非常に抽象的なものだが、上記のように表現意図を限定する、具体的な指標となる場合もある。

20 保二は酔ったのか、お父さんも機嫌よかったじゃないか、とくり返した。それがるつ子を喜ばせしていると勘違いして、逆にするつ子をちくちく刺しているとは、毛ほども思い及ばなかったらしい。

21 白一色に装ったるつ子は、雪のようにふんわりと花嫁の座にいた。(略)清浄に真っ白なるつ子は、目を伏せてただふわりと椅子にいた。

20は19同様、「どのように」刺すのかに焦点がある。「ぐさぐさ」でも「ぶすっ」でもなく、「ちくちく」した刺激だ。正面からダメージを与えたり、一撃で致命傷を負わせるものではないが、小さいながらもはっきりなしに与えられる痛痒は、堪え難い不快感をもたらすのだ。

21は結婚式の場面である。白無垢の花嫁は、「ふんわりと」座に着いている。「雪のように」といっても、降り積もり固まったそれではなく、舞い降りた最初のひとひら、その軽さを想起させる。後続の「清浄に真っ白」から雪を連想するのは月並みだが、そこに「ふんわり」「ふわり」

を合わせたことで、イメージはさらなる広がりを見せる。

22 開業してやっ行ってこうという人には思えない、覇氣のなさはどうしたものだろう。溜り水のような男だと思う。平穩で、浅く、動かず、底にぬるぬるとした青ン泥が沈んでいる。天気の良い日にも透明ではなく、雨が降り風が吹くときには、底に張ったぬるが雑巾ぐらいの大きさに千切れて、浮上ってくる。要するに流れ水ではない不安感、溜り水である腐りを、老人のカンで疑う。

あっけなく恋に落ちたるつ子を、父も祖母も心配する。父は「あの男は駄目だ」と言い、祖母は「覇氣のなさ」が気に入らない。

「色男」が悪いわけではないが、どうしても「堅実さ」や「厚味」が見出せない。「溜り水のような男」と言われて一瞬戸惑うが、てきぱきとした快活さ、打てば響くような鋭敏さがないと言うことだ。どんよりとして、淀んだ水のような男に、孫娘を託してよいものか。年寄りの目は、「やさ男」の外見に潜んだ、「青ン泥」の「ぬるぬる」まで見透かしてしまう。直観が連想を呼び、嫌悪感具体的なイメージへと広がり、思いがけない表現で人の本質を描き切っている。

このような場合、オノマトペの働きは大きい。殊に、慣用句的で陳腐な比喻表現と共起すると、その表現が本来の比喻性を取り戻すかのような効果を上げることが少なくないのである(8)。

23 長いのちのうちには、なんだかびんびんからだへ響いてくるようなこともあるし、そういうたちの人はその度に智恵熱をだすものだよ。

震災の後、無我夢中で過ごしてきたある日、見合いした相手が行方不明のままだと言うことを耳にした。「可もなし不可もなし」と見て、こちらから断った縁であったのに、「ぎくつとした刺戟」を受けたるつ子は二日ほどして発熱した。

祖母は、るつ子自身気付かない神経の細さ、心の疲れをいたわって、冗談まじりに「知恵熱みたいなものだよ」と言う。「からだへ響いてくる」のは声や音響だが、何かに感動したり、打撃を受けたりした場合も、それが全身を駆け巡るかのような体感を覚えることは少なくない。振動を表す「びんびん」は、そのような体感——神経が事象や言動に刺激されるさまを、端的に言い表している一語だろう。

24 ひたひたと感情のしみこんでくるような着物の話

25 ひたひたとしみるように話すひと。

友人が猫を貰うのについて行ったとき、偶然行き合った長唄の師匠という人が、るつ子の着物を似合うとほめてくれた。「小さい時の着物だ

から、胸から下ははぎだらけで、袴の下でなければ着られない」と答えると、気に入った着物は場所塞げでも「なんかいじらしく取つてある」、「一生のうちに着るどの着物もが、そうだといいでしょうね。」と言われた。名を訊かず別れたその人は美しかったが、それ以上に話も話し方も印象的で、記憶に残ることとなった。

「しみる」は液体が物ににじみ込む意から派生して、心に強く感じる意を持つ。が、水や波が押し寄せるさまをいう「ひたひた」を添えることで、本来的な意味が甦るのである。

26 旦那様、といっているのである。気の高ぶりやすくなっているつ子に、この字はしみた。

呉服屋から祝い物が届いた。結婚が決まったと訊いて、父と縁ある人が贈つて来たのだ。「旦那様にはさし出たことをとお小言、覚悟いたしております」とある「旦那様」とは、父のことである。

「この字はしみた」とはどういうことか。いわば日陰の身で生きて来た人の「位置を、これほどはつきり語る言葉はない。」相手のことを思うと、胸に迫るものがあると言うのだろう。

「字」が「しみた」という結び付きは一見して異例であり、触覚から視覚への転移に思えるが、「心に」という語を補えばごく慣用的な表現であることに気付く。次項で扱う共感覚表現とは区別できよう。

27 かすかな愁いを伴った恍惚である。こみあげてきて、じつとりと拵がる快いうつつなさであった。

「かすかな愁いを伴った恍惚」——恋である。るつ子の恋は、「急撃してきた」「墜落してきている」とあり、あたかも事故のように、不可抗力なものとして訪れる。しかしその後は攻め方を変え、それとは自覚させないまま、甘美にるつ子を巻き込んでいく。

ここでも感情は液体に喩えられる。「こみあげる」も「拵がる」も、気持ちや思いにあてられる表現だが、「じつとり」が並ぶと、含まれた水分が輪となってしみ出すイメージが喚起される。「こみあげる」は本来の意味「溢れ出る」が意識され、「拵がる」ものが何であるかが限定される、とでも言えばよいだろうか。

造語を用いたり、目新しい物言いをしているわけではないが、見慣れた語でも敢えて組み合わせることで、忘れかけた意味が浮上ることがある。その結果、作中人物の感情、感覚が、読み手にも生き生きと伝わってくるのである。

4.2.2 共感覚表現

いわゆる共感覚表現は4例(のべ、異なりとも)にとどまった。

28 八百屋の店先から新聞紙がふわふわとところがつた。粘こいよう
な風だった。

九月一日は大抵二百十日に当たるといふ。震災の日もそうだった。祖母が冗談まじりに「空の上のほうじゃ雨っ気と風っ気がとぐる巻いている」と言うくらい、朝から蒸し暑い。

風が吹いても少しもさわやかでなく、「粘こい」は肌にまとわりつく不快さを連想させる。温度と湿度を過分に含み、重く淀んだ空気の流れは、本来適用し得ない形容を受け入れる。

29 風のない、みっちりと暑い晩だった。

こちらは夏休みの夜である。夜になっても気温が下がらず、寝苦しさが予想されるまま十二時近くになっていた。風がなく、昼の熱を吸い込んだ空気は微動だにしないさまを、「みっちり」と評した点がおもしろい。温度は肌の表面で感じるが、密度ならそこに圧迫感が加わる。暑さに取り込まれ、包み込まれて、逃げ場のない思いが伝わるようだ。

30 今日和子から思いがけなくどすんとしたことをきかされて、やっと目がさめ、なにか際立って立遅れたような、気重い感じがあった。

親しい友人にラブレターが来た。だが「字も下手くそだし、文句もまるで目茶目茶」、とてもではないが願い下げだという。もつときちんとした人を望む意見に、中の姉の「さっさと嫁にいっちまうのが親孝行」とのことばが思い出されて、るつ子は我が身の幼さを思い知る。

同い年の友人から、しっかりした結婚観を「きかされ」て「どすん」と衝撃を受けたとしても、オノマトペを添えた点で新鮮だ。さらに語順を入れ替えた結果、受けた心理的打撃が聴覚刺激に置き換えられ、受けとめられたかのような印象を与える。

31 なぜだか時々、妙にごつんとやさしくなくなることがあるのね。

上の姉が嫁いでから病に臥せった母は、「看病なんかは行届いてやさしい」るつ子が、着物に関しては子供の頃から「私の思うようにしてくれたことがない」と嘆く。真面目であるが故に融通の利かない性格は、時として相手を傷付ける。とりつくしまのない頑固さは、やんわりといなすことを知らないのだ。

この後に続く「依怙地」を「ごつん」に置き換えてもよいが、ぶつかる硬さ、その痛さまでも想起させはしない。具体的な触感、殊に痛覚を表すオノマトペを抽象的な心証に用いた効果は、正当な共感覚表現から外れるかもしれないが、関連性はあるものと見て、ここに入れておく。

5 まとめ

概観した通り、採取した用例中、オノマトペを用いた表現が大半を占めた。幸田文の場合、着物の手ざわり／肌ざわりを描写するには、この表現が専ら用いられているらしい。しかし一口にオノマトペといっても、表現には広がりがあることは、以下のような用例(9)からも明らかである(下線部引用者)。

A 私は木綿のメリヤスの下着の上にそれ(パンツ)をはかされるのだったが、それでもチクチク、ゴワゴワ(毛糸が古かったのだから)する。[本間千枝子=そばを打つ父]

B 医者が扉の間から毛皮のようにごわごわした厚司を着た躰を僕のままへあらわした。[大江健三郎=芽むしり仔撃ち]

C 看護婦たちが、ごわごわと音のするほど糊の利いた白衣に着換えてお焼香に来、匂いの高い菊を手向ける。[幸田文=おとうと]

同じ「ごわごわ」というオノマトペを用いながら、A・B・Cの各例にはレベル差がある。Aは書き手の感じている触感であり、「ごわごわする」と動詞化して、他の描写を用いない。Bは書き手の視覚的判断で、どのように「ごわごわした」状態かを、「毛皮のように」という直喩で補足説明する。Cも書き手の判断だが、「ごわごわ」は「糊の利いた」状態を表す音(聴覚刺激)として用いている。

今後は、主にCのような用例を中心に採取・分析を進める。また、今回は僅か4例しか得られなかった共感覚表現についても見なおしたい。そのためには着物の「肌ざわり」だけでなく、より広い触覚表現を集めていく所存である。

【注】

(1) 参考文献 11「解説」参照

(2) 聴覚表現については、既に予備調査を行っている。

拙稿「幸田文の音表現——『台所のおと』を対象として——」(『日本語研究と日本語教育(森田良行教授古稀記念論文集)』明治書院1999、279～291頁)参照

(3) 「共感覚 英 *synaesthesia, synesthesia*

もともとは、音が聞えると色が見えるというように、ある刺激に対して、その本来の感覚に他の感覚が伴って生じる現象を表わす心理学用語であるが、言語学の用語としては、ある領域の感覚を表わす形式を用いて他の領域の感覚を表わすことをいう。比喩の一種で、意味変化の原因の一つである。」

(『言語学大辞典』(第6巻 術語編)参照、傍線引用者)

- (4) 「今回の用例採集では、視覚が圧倒的に多く全体の四割五分ほどを占めた。二番目に多いのは聴覚で、視聴覚を合わせると全体の約七割にも達する。次に多いのは触覚関係で全体の二割五分ほどになり、嗅覚の例はもっと少なく、味覚の例はさらに少なかった。」
- (参考文献 11 「解説」 10 頁下段参照、傍線引用者)
- (5) 辞書は複数用いたが、引用した語釈は『日本国語大辞典』(小学館 1972～1976)に拠る。
- (6) 拙稿「幸田文のオノマトペ——初期作品を対象として——」(『早稲田大学文学研究科紀要』42-Ⅲ 1997、221～232 頁) 参照
- (7) 参考文献 5 「第 2 部 比喩表現の分類」 参照
- (8) 拙稿『『流れる』の比喩表現』(『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』11 1998、245～263 頁) 参照
- (9) 参項文献 11 「触感」の下位分類〈粗〉の項(304～307 頁)参照

【参考文献】

- 1 市川 孝 「幸田文の文体」(講座現代語 5) 明治書院 1963
- 2 小島孝三郎『現代文学とオノマトペ』桜楓社 1972
- 3 天沼 寧編『擬音語・擬態語辞典』東京堂 1974
- 4 池上嘉彦 『意味論』大修館書店 1975
- 5 中村 明 『比喩表現の理論と分類』秀英出版 1977
- 6 " 『比喩表現辞典』角川書店 1977 (1995 改訂新版)
- 7 浅野鶴子編『擬音語・擬態語辞典』角川書店 1978
- 8 山梨正明 『比喩と理解』(認知科学選書 17) 東京大学出版会
1988
- 9 楠見 孝 『比喩の処理過程と意味構造』風間書房 1995
- 10 中村 明 『日本語レトリックの体系——文体のなかにある表現
技法のひろがり』岩波書店 1991
- 11 " 『感覚表現辞典』東京堂 1995

(すいとう しんこ／早稲田大学大学院文学研究科日本語日本文化専攻 博士後期課程 5 年)